倫理学通信－１

２４期生の諸君。高校３年生というと昔流行った舟木和夫という人の歌を思い出しますが、ともかくみんなの顔には最高学年生としての何か責任感というか、悲壮感というか、今までとは違ったものを感じるのは私だけでしょうか。残された時間は一年を切りました。頭と心には受験という重苦しいものがのしかかっていることかと思います。そんなとき、こんなプリントを見て、その字の多さに圧倒され、「こんなものを読む暇なんかない。今は忙しいんじゃ」と残酷にもプリント引きちぎってゴミ箱に捨てるとか、くしゃくしゃにして鼻をかむとかする人もあろうかと危惧し、最初に言っておきます。このプリントは捨てないように。今読まなくても、ファイルに保存しておくこと、と。

私は決して、この書き物で受験勉強に忙しいみんなの時間を奪いたいと思っているのではありません。また一つ読んでくれれば「しめしめ、しめた。しめ子のウサギじゃ」と言って、次のプリントを、また次のをと、徐々にみんなの脳みそをゆがめて（これを洗脳と言う）いくつもりもありません。だから、安心して読んでください。

もう一つ言っておきたいことがあります。それは、ここで説明したいと思っている事柄は、後で役に立つのは確かだが、今も役に立つ（はず）。私はなんとか受験勉強にも役に立つ仕方で書きたい、つまり貴重な知識を提供できればと思っています。かつて受験勉強をしていたとき薦められた英語の長文問題の参考書がありました。そこには色んな英米の作家たちの文章が例文として載っていました。そのうちの一人にバートランド・ラッセルというおっさんがいました。この人は後で知ったのですが、２０世紀の有名な分析哲学者（言葉を研究することによって、現実世界の解明をしようとする哲学）です。（また現代社会の受講生には知ってもらいたいことですが、１９５５年に核兵器反対を主張してアインシュタインと一緒に「ラッセル・アインシュタイン宣言」を出しています）。彼の生活と哲学には賛成できない面も多いのですが、ともかく普通試験に出される長文は、このような学のある人の文で、思想的な裏付けのあるものです。そういう文を前にするとき、その裏にある思想を知っているのと知っていないのでは、解読に大きな違いが出るでしょう。そういう意味で、これらのプリントが微力ながら貢献できたら、とも思っています。

○　○　○　○　○　○

１９９７年、日本全国を震撼させた（「震え上がらせた」という意味）事件が起こりました。神戸のある小学校の校門に切断された子供の死体が置かれていたのです。実はこの学校は私の実家のすぐ近くで、すごく気味が悪くなり、両親に気をつけるように言ったことを覚えています。その後犯人は「サカキバラセイト」の名で、警察を馬鹿にするような多少幼稚な文章、汚い字の挑戦状のような文を警察に送りつけてきたので、てっきり犯人は若者か、少々オタクっぽい大人ではないかと思いました。ところがなんと、犯人は１４歳の中学生だったのです。

この衝撃的な事件の後、あるテレビ番組で大学生が居並ぶ著名人を前にして「なぜ人を殺してはいけないのか」と質問し誰も答えられなかったという、もう一つの衝撃的事件が起こりました。私はこの番組を見ませんでしたが、この出来事をうけて『文藝春秋』という雑誌が、各界の著名人１４名に書いてもらった「解答」を載せていたのをぱらぱらとめくり、「この問題はこんなに世間を沸せとるんか」と思いました。一つの解答に、「あなたは自分が殺されるのがいやでしょう。だから自分がいやなことを他人にしてはいけないのです」とありました。確かにそうだけれど、「もし『俺は殺されてもええで』という者がいたら（そしてきっときるでしょう）、この理屈は通用せえへんのとちゃうか」と思ったこ

とを覚えています。ともかく納得できる解答はありませんでした。

この「なぜ人を殺す（正確に言うと、無実の人の命を奪う）ことは悪いことか」という問に答えるのは、簡単ではありません。ここで注意すべきは、普通の人は、その問に答えられなくても、無実の人を殺すことはわるいということは分かっているということです。ただ、殺人は悪いということが分かっていることと、なぜ悪いのかを説明することは別なのです。

人間の行いには善悪がある。なぜ善悪があるのか、どういう行いが善で、どういう行いが悪か、などを考える学問を倫理学と言います。今見たように、倫理の問題はあまり考えなくても常識でもって解決できるのですが、突き詰めていくと非常に複雑です。そして、「なぜ」を説明しなければ、反抗的な人には通用しないでしょう。この一学期には倫理学を紹介したいと案を練っていましたが、あに図らんや、弟はかるや、倫理の授業のできる土曜日はほとんどない。それで、この不足を少しでも補わんために、プリントの形で少しだけでも説明をしたいと考えたわけです。

ただし、初めて習う内容をプリントだけで勉強するのは至難の業（非常に難しいという意味）です。学校の授業では先生が口で説明をし、黒板にいろいろと書いて説明してくれるが、これは内容を理解するためにすこぶる役に立ちます。一人で本などを読みながら勉強する（これを独学と言う）は、簡単ではありません。倫理学をプリントで勉強するのは、独学と同じで、難しいです。

さて、むかし三川台で倫理を教えたとき、ある元気な中学生に「善を行い、悪を避けるというような行いをしていたら、このどろどろした世間で生きていかれないのでは」と言われたことをよく覚えています。なるほどそれは一理ある。けれど本当にそうでしょうか。

みんなは２００５年に起こった耐震強度偽装事件を覚えていますか。建物を建てるときには、地震が起こっても大丈夫なように一定の鉄筋などを使うように決められています。けれど鉄筋はお金がかかります。そこで建築費を安く上げるために、決められた量より少ない鉄筋を使ってビルを建てていたことが発覚したのです。このとき、この偽装をした建築士は奥さんが病気で、偽装を行わないと仕事がもらえなかったなどと弁明したのですが、「そりゃかわいそうや、奥さんが病気やったら仕方がないわ。だいたい決められたことを馬鹿正直にきちっと従っていたら、この世知辛い世の中でくらしていけへんで」とは誰も言いませんでした。当たり前だのクラッカーでしょ。不十分な耐震強度のアパートでは、安心して暮らすことができないから。

あの頃一連の食品偽装事件が発覚していました。輸入した牛肉やウナギに「国産」のラベルを貼って売るというやつ、「賞味期限」をごまかすという手合いです。こういう事件が次々に発覚したのでマスコミは一斉に「倫理観の欠如」を声高に叫び、「モラル。モラル」の大合唱が始まりました。不思議なことに、「モラルなんて堅いことを言うて、まじめに規則を守っとったら金儲けはできへんで」という声は聞こえてきませんでした。心中ではそう思っていた人も少なからずいたはずですが・・。

言いたいことは、確かに正直に生きようとすると、かなりの困難を覚悟しなければなりません。しかし、だからといって、不正なことをするならば、社会を混乱に陥れ、多くの人に迷惑をかけ、自分も結局損をすることになる。聖書に「正義によって得るわずかなものは、不義によって得る多くのものにまさる」（格言の書、16,8）とあるのは正鵠を射ている（正しいという意味）と思います。試験の答えを間違っても生きていけるが、善悪の判断を間違えると一生を棒に振る危険がある。

ただし、「何が善で何が悪か」は、時にはそんなに簡単に判断できないことがあります。それで、少し落ち着いて勉強する価値があるのです。それが一学期に少しでも出来たら、と思っています。